

10. 縄文時代の技術（編み物製品）

縄文時代前期の曾畠式土器の時期に比定される貯蔵穴を中心として、21点を数える編み物が検出された。編み物に関する報告例は、近年増加の傾向にあるが、植物遺体は腐食し易いこともあって、直接資料は意外に少なく、土器の圧痕などをもとにした間接資料の報告が多い。また時期的にも、先史時代に遡るものは少なく、とりわけ縄文前期の資料は、数例を除けば殆ど皆無と言ってよい。その意味で、今回当遺跡から検出された編み物は、縄文前期における人々の技術水準を知る上でも恰好の資料となるものと思われる。以下、観察によって得られた所見を報告したい。

＜編み物の出土状況＞

註¹

今回出土した編み物は、1点を除けばいずれも当遺跡のA—2、B—2区付近に分布する貯蔵穴内からの検出である。貯蔵穴は総数62基で、そのうち縄文後・晚期の貯蔵穴（5基）からは1点、縄文前期・曾畠式土器の時期に比定される貯蔵穴（57基）からは19点の編み物が、それぞれ検出されている。単純に見ても貯蔵穴の約1/3に編み物が遺存していることになる。腐食して失われた編み物や、再利用などのため撤去された編み物の存在を考えれば、この割合は増加するに相違なく、編み物の設置は貯蔵穴の構成に不可欠の要件であったことが窺える。

次に、貯蔵穴内の編み物の検出状況であるが、ほとんどは貯蔵穴の底面に密着するかたちで検出されており、明らかに壁面に沿って立ち上がるものは、第34号貯蔵穴内の10の編み物に見るのみである。このように編み物の残存が底部にかぎられているのは、数度にわたるドングリ等の掘り出しと、その後の廃棄により、上部が破壊された可能性が高いためと考えられる。

また貯蔵穴内のドングリの残存状況を見ると、いずれも編み物の上に乗るかたちで検出されており、編み物の下に及ぶものは見られない。このため、貯蔵穴にドングリを保存する際には、まず内部に区画のため編み物を敷き込み、その後でドングリを入れたものと判断できる。遺跡周辺は低湿地であり、現在でも穴を掘ると水が滲み出してくるほどである。ドングリは保存の際、虫害を防ぐため、これらの低湿地の貯蔵穴に、言わば水に漬け込む形で保存されたものと推定されるが、その意味でも編み物の設置は、通水性を確保しながら貯蔵穴の崩壊とドングリの土中への埋没を防ぎ、ドングリの取り出しを容易にするなどの目的を持っていたものと考えられる。

＜編み物の形態＞（P134貯蔵穴推定模式図参照）

貯蔵穴内に残された編み物は、前述の通り上部が失われたものが多いが、少数の遺物から全体の形態を類推すると次のようになる。なお、ここで使用するカゴ・ザルの呼称の区別は、比較的に大型、編み目が粗く、運搬や貯蔵を目的に製作されたもの→カゴ、同じく小型、編み目が密で、註²生活雑器としての用途を持つもの→ザル、とそれぞれ呼びならわした。

(1)ザル状と推定されるもの（5, 14, 17, 21）

植物遺体であるのにも係わらず、比較的に残りが良く、全体の形態をほぼ推定できる資料が多い。中でも14は、底部～胴部～口縁にかけての技法の全体像が知られる。推定される直径は約30cm

内外、深さが12cm程度であり、頻繁に使用する生活用具としては手頃な大きさの物である。また17は、口縁を欠くものの底部を中心に胴部～口縁近くまで放射状に遺物が残存しており、法量も14とほぼ同程度のものと推定される。

これらの資料に共通することは、いずれも使用される素材が均質でやや細く、編み目（2本越え・2本潜り・1本送りが多い）も詰まっており、丁寧かつ堅牢に製作されていることである。他の編み物が比較的に粗製で、編み目も粗いものが多いことを考えると、これらは貯蔵穴用に本来的に製作されたものではなく、いずれも一般的な生活用具として作られ、後に貯蔵穴用として転用されたか、放置もしくは投棄されたものである可能性が高いと思われる。

(2)袋状のものと推定されるもの(11)

ほとんどの貯蔵穴中のドングリは、いずれも掘り残してあったが、第36号貯蔵穴では、ドングリは多量にまとまって塊状をなしていた。11の編み物は、これらの塊状のドングリの下に敷き込まれるような形で検出されている。しかもドングリ塊の上部にも、断片的にではあるが、同じ編み物の細片が数ヶ所でドングリを覆っているのが分かる。ドングリのまとまり具合などからすれば、11の編み物の原形は、あるいは袋状を呈しており、ドングリの運搬に使用されたあと、そのまま貯蔵穴中に保管されたものではあるまいか。

(3)その他 カゴ状のものと推定されるもの(10)

ほとんどの編み物が貯蔵穴の底面からほぼ水平に検出されているのに対し、10の編み物のみが壁面に沿って約15cm程度の立ち上がりを見せる。口縁部が失われているため、原形は貯蔵穴の縁まで延びるかどうかは不明だが、いずれにせよ貯蔵穴の形に合わせて「いびつ」ながらも、カゴ状の形態を呈していたことが知られる。底面に検出された他の資料中にも、同様に壁面に沿って立ち上がる傾向を示すものが多く、またいずれも縁留めを施した例が見られないことから、編み物が底面のみに敷き込まれたものとは考えにくい。やはり、貯蔵穴の規模に見合う大型のカゴとして設置されたと考えた方が妥当であろう。

なお、これらの編み物に共通する特徴は、「1本越え・1本潜り・1本送り」が多く比較的編み目の大きな、「四ツ目編み」の手法をとっていること、編み材が不揃いで、いかにも粗製であること、などである。恐らくは数例見られる「ザル」が転用品と推定されるのに対して、これらの粗製の編み物は、貯蔵穴用に本来的に製作し設置されたものであろう。

一覧表の「全体の形状」の中では、不明と記した編み物片も、その多くは(3)のカゴ状の編み物に類似しており、貯蔵穴に本来的に設置した編み物と判断している。

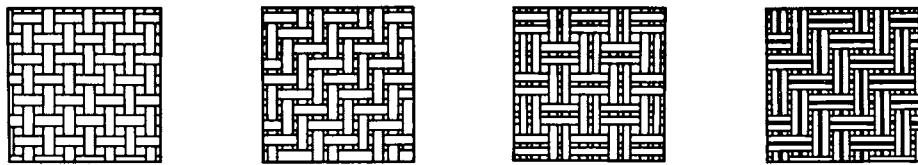
<編み方の技術>

(1)編み方

編み物製品の基本的な編み方は、網代編み・四ツ目編み・六ツ目編み・ザル編みなどが一般的な例として挙げられる。^{註3}このうち、当遺跡において見られる編み方は、網代編みと四ツ目編みの二通りに限られる。両者の区別は明確ではないが、「網代編み」は、比較的に編み目の詰まった編

第2節 考 察

み方であり、「四ツ目編み」は、逆に目の空いた、いわば難な編み方と言える。当遺跡出土の編み物の場合、おおまかには全点が広義の網代編みに含まれようが、編み目に概ね素材1本分以上の隙間が認められる場合には、明らかに隙間の作製意図があったものとみなして「四ツ目編み」と称することとした。なお両者の比率であるが、全21点中観察可能な19点の内訳は、①網代編み14点②四ツ目編み4点①と②の両方が混在するもの1点である。次に、経条（たて芯）緯条（よこ芯）との組み合わせ本数による編み目のバリエーションであるが、当遺跡で見られる編み方は4通りが挙げられ、その比率は次のようになる。



- | | | | |
|-----------------------------------|-----------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|
| ① 1本越え・1本潜り・
1本送り
12例 (48%) | ② 2本越え・2本潜り・
1本送り
11例 (44%) | ③ 2本越え・2本潜り・
2本送り
1例 (4%) | ④ 4本越え・4本潜り・
2本送り
1例 (4%) |
|-----------------------------------|-----------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|
- ※①～④が混在するものもある。

編み目模式図

こうした結果から、当遺跡において基調をなす編み目は、①と②であることが言える。ただし、編み物の形態と編み目の相関関係を見ると、①の編み方はカゴと推定される遺物において多く、②の編み方はザルの編み目において、③、④はザルの底編みにおいてのみ認められる。また、5や17に見られるように、一個体の編み物中においても部位により編み方の変わる例を見る事ができる。つまり、編み方や編み目の違いは、単に思いつきのものではなく、製作の対象となる製品の種類によって、また同一製品においても部位の違いにより編み方を使い分けている事が知られるのである。この場合、一般的に②の技法はより精巧な製品を作る場合に使用している事が知られる。

(2)技法

次に、編み物の部位による編み方の技法であるが、比較的に残存の程度の良いいくつかの資料を中心に、部位別の技法の違いを見てみたい。

(口縁部)

口縁部の技法が知られる資料は、3点がある。そのうち、14と17はザルと推定される編み物である。いずれも、経条の余った部分を折り曲げて束ね、さらにツールで巻き補強している。現在でも殆どの編み物製品は、基本的に同様の技法により縁留めされている例を見ることができる。また、7でも同じく縁留めの技法が見られるが、この資料は付随する胴部の編み材が、幅広く、編み方や編み目も他の2例のザルと異なっている。このため恐らくは大型のカゴ類の編み物の縁と推定するものである。縁留めそれ自体の技法は、ザルの例と変わりはない。また、1の編み物は

口縁部付近と推定しているが、横に数条のツルを編み込んでいるのが観察される。補修の目的よりも恐らく補強の意味を持つものと考えている。

(胴部～底部)

全体の形態が不明な編み物が多く、胴部～底部の編み方の明確な区別が難しいので、胴部と底部を一括した。

まずザル状の編み物片の場合は、胴部の編み方と展開を知ることができる。まず14の資料は、胴部全体を不規則ながらも、「2本越え・2本潜り・1本送り」で編み、底部へと続いている。一方、17の資料は、底部では2本の経条を1単位とした「4本越え・4本潜り・2本送り」で約12cm程度の底編みを縦横になしたあと、胴部では、それを1本で1条の経条に放射状に展開し、「1本越え・1本潜り・1本送り」の基本的な編み方をなし、さらに口縁部近くでは、「2本越え・2本潜り・1本送り」と編み方を変えている。類似した編み方は5の資料にも見られる。底部で「2本越え・2本潜り・2本送り」で底編みをした後、経条を放射状に展開し、胴部では、「2本越え・2本潜り・1本送り」の編み方で展開している。いずれにしても、ザル状の編み物の場合には、基本的には底編みをした後で、放射状に経条を展開させ、部位により編み方を変え、完成させている。

一方で、その他に検出した編み物である。前述のように検出部位の不明なものが多いが、いずれも貯蔵穴の底面で検出されていることから、底部～胴部にかけての部位であると推定している。これらの編み物の特徴は、編み方は四つ目編みが多く、網代編みでも比較的に編み目の大きいものが多い。また、編み材もザル編みに比べれば、不揃いで雑な作りとの印象を否めない。典型的な例としては、8や20の資料が挙げられよう。ただこれらの資料は、底面では、「1本越え・1本潜り・1本送り」の四つ目編みが多いが、壁面が倒れて、折り重なっている部分などでは、「2本越え・2本潜り・1本送り」など編み方の異なる部位を同時に出土しているし、また見られるように、胴部の上方の口縁部に近い部分では、下部よりも比較的に編み材の幅の狭いものを使用したりなど、部位による編み分けの技術なども推定することができる。また、一般的に現在でも編み物製品中には補強のため一定の間隔毎に芯を入れる例があるが、当遺跡の出土資料中には認められなかった。

(3)編み材の選択

出土の資料によっては、編み材が非常に均質なもの、あるいは不揃いのものなど、さまざまな例が認められた。すでに指摘したように、一般的にはザル状の生活雑器には均質な材料を使用しており、逆に本来的に貯蔵穴に設置されたと思われるカゴ状の製品には、編み材は不揃いなものが多い。このことは、当時の人々が、製作しようとする製品の種類や、用途によって材料の選択を行っていたことを裏付けている。また材料の調達に当たっても、たとえば材質は違うものの、モミジから編み材を採取する場合には、樹皮・樹幹の剥ぎ易い梅雨上がりの一時期を見計らって採取・保存しておき、製品を製作する場合には、2～3日水に漬け柔らかくした後で使用するな

第2節 考 察

註4

どの民俗例も報告されている。当遺跡の編み物はいずれも、木質の材料で製作されているが、材料の採取や選択にあたっては当然同様の技術的な知識を有していたことが考えられる。

なお、編み物の素材については、第IV章第1節の材質同定の項を参照願いたい。

<結び>

西日本における縄文時代の編み物は少数の例外を除けば、「2本越え・2本潜り・1本送り」^{註5}が基調になるものと言われている。しかし、編み物の直接資料の報告例が少なく、またその時期も縄文時代後・晚期に限られており、現在の時点では編み物の地理的・時間的な変遷を明確にできていないのが現状である。

前述のように当遺跡出土の編み物は、ほとんどが縄文時代前期の資料である。21点の資料中、第45号貯蔵穴から出土した15の編み物の細片のみが後・晚期の資料であるが、「1本越え・1本潜り・1本送り」の基本的な編み方を繰り返しており、両者の間に技術的な差異は認められない。資料が少ないため判然とはしないが、前期の技術が後・晚期に到るまで伝えられていることが分かる。

さて、当遺跡に匹敵する縄文時代前期の編み物の直接資料は、福井県鳥浜貝塚に見られる。鳥浜貝塚での出土編み物の種類は、「カゴ・ザル・バスケット・袋などの容器、敷き物、網類」など多彩であり、精巧に作られた生活上の雑器が数種類にわたって出土している。^{註6}それに対して、当遺跡出土の編み物は「カゴ・ザル・袋」などに限られているのが特徴である。また、鳥浜に見られるモジリ編みなどの編み方が、当遺跡では見られること、使用される素材が異なることなどが両者の相違点として挙げられる。ただ当遺跡の編み物は、貯蔵穴に伴うものであり、いずれも貯蔵穴の中に設置され、ドングリの貯蔵の際通水性を確保しながら、貯蔵穴の崩壊を防ぎ、ドングリの取り出しを容易にする目的を持ったものと推定される。かなり高度の編み物の技術に対して、出土遺物の種類の少なさは、設置場所が貯蔵穴に限定されていたためであり、素材の違いも水中で使用するという用途の違いで理解できよう。前述した豊富な編み方の技術や材料の選択の仕方などからして、当遺跡においても、鳥浜貝塚におけるような、種々の編み物製品の存在は当然予想される。曾畠遺跡の生活域での編み物の出土に期待が持たれるところである。

註1. 不明の1点は、明確な遺構確認を行なう以前に検出されたものであるが、恐らくは貯蔵穴に伴なう遺物であろう。

註2. 「カゴ」および「ザル」の区別は必ずしも明確ではない。ここでは「大日本百科辞典」（小学館）「日本民族資料事典」（文化庁文化財保護部）などを参考にしておおまかに規定するにとどめた。

註3. 一般的な編み方の模式図は、本稿の最後に示している。

註4. 天野 武『民具の見方』 第一法規 1983

註5. 荒木ヨシ「縄文時代の網代編み」『物資文化』12. 1968

註6. 森川昌和他 『鳥浜貝塚』 1979

第IV章 分析・考察



第121図 編み物製品実測図(1)

第2節 考 察



第122図 編み物製品実測図(2)



第123図 編み物製品実測図(3)

9. No.15編み物 (第45号貯蔵穴)

10. No.12編み物 (第39号貯蔵穴)

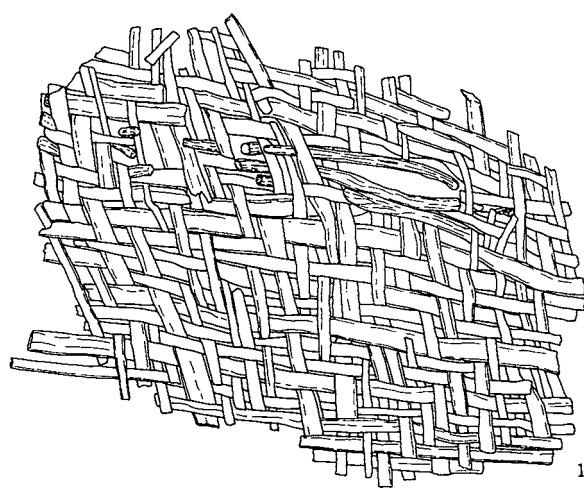
11. No.21編み物 (A-2区出土)

12. No.20編み物 (第62号貯蔵穴)

第2節 考 察



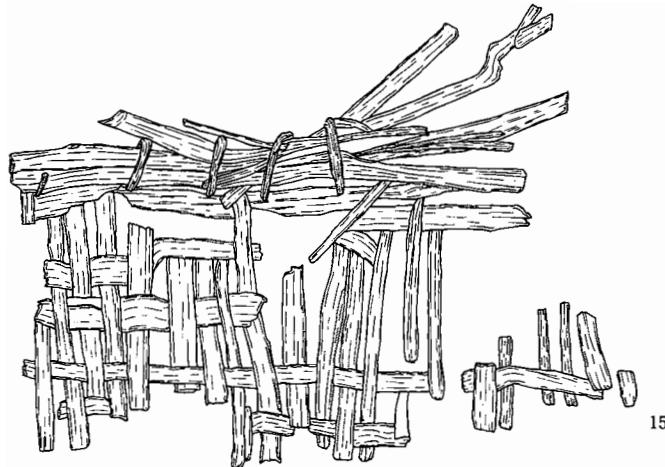
13



13. No. 14編み物 (第43号貯藏穴)

14. No. 1編み物 (第1号貯藏穴)

第124図 編み物製品実測図(4)



第125図 編み物製品実測図(5)

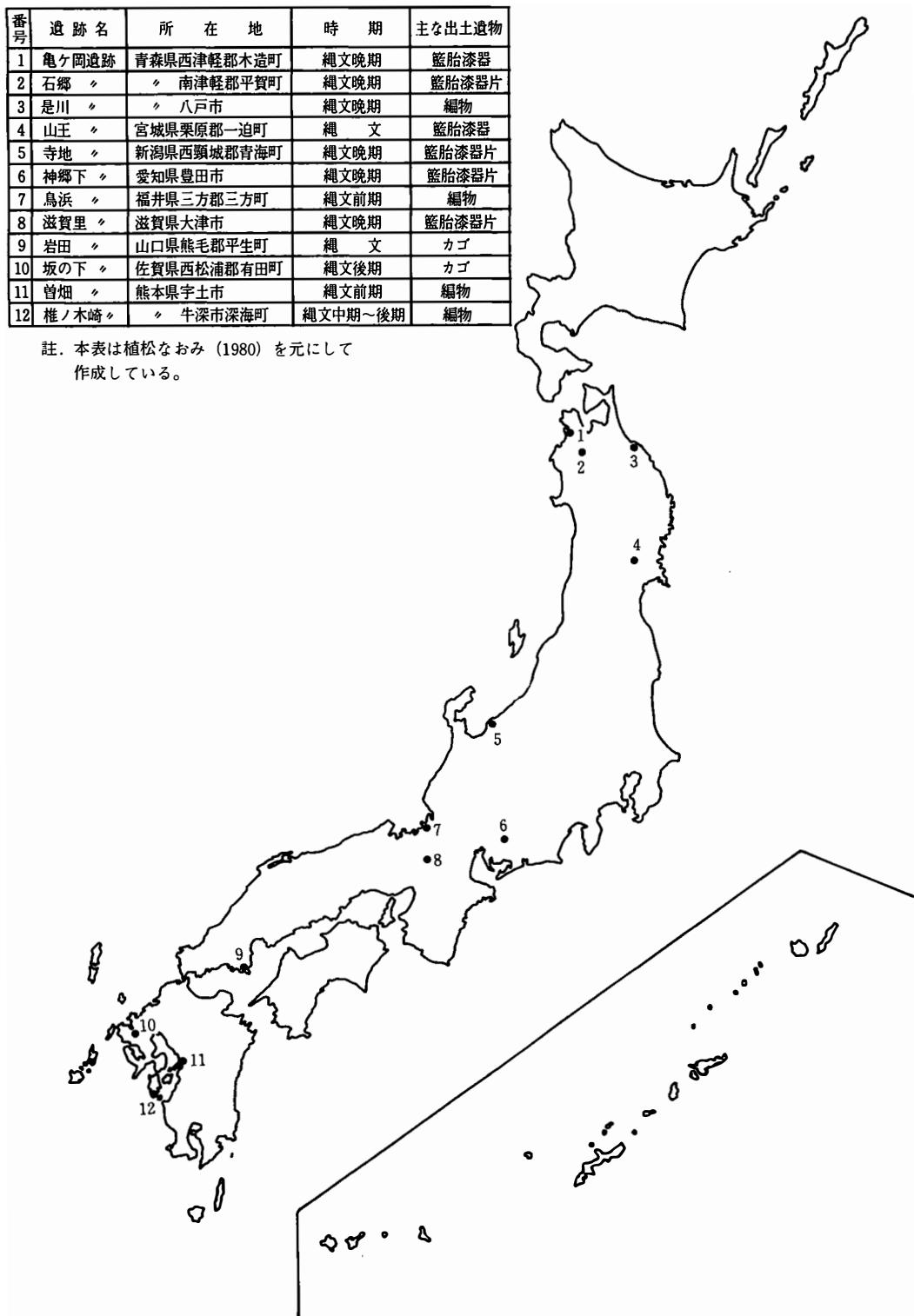
15. No. 7 編み物 (第15号貯蔵穴)
16. No. 1 編み物 (第1号貯蔵穴)



第2節 考 察

番号	遺跡名	所 在 地	時 期	主な出土遺物
1	亀ヶ岡遺跡	青森県西津軽郡木造町	縄文晩期	籠胎漆器
2	石郷	〃 南津軽郡平賀町	縄文晩期	籠胎漆器片
3	是川	〃 八戸市	縄文晩期	編物
4	山王	宮城県栗原郡一迫町	縄 文	籠胎漆器
5	寺地	新潟県西頸城郡青海町	縄文晩期	籠胎漆器片
6	神郷下	愛知県豊田市	縄文晩期	籠胎漆器片
7	鳥浜	福井県三方郡三方町	縄文前期	編物
8	滋賀里	滋賀県大津市	縄文晩期	籠胎漆器片
9	岩田	山口県熊毛郡平生町	縄 文	カゴ
10	坂の下	佐賀県西松浦郡有田町	縄文後期	カゴ
11	曾畑	熊本県宇土市	縄文前期	編物
12	椎ノ木崎	〃 牛深市深海町	縄文中期～後期	編物

註. 本表は植松なおみ(1980)を元にして
作成している。



第126図 縄文時代編み物製品出土地図

写真 1



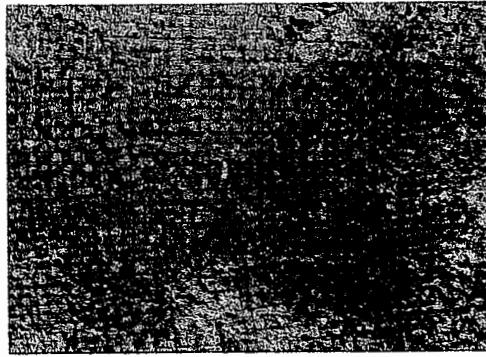
1. No.1 編み物（第1号貯蔵穴）



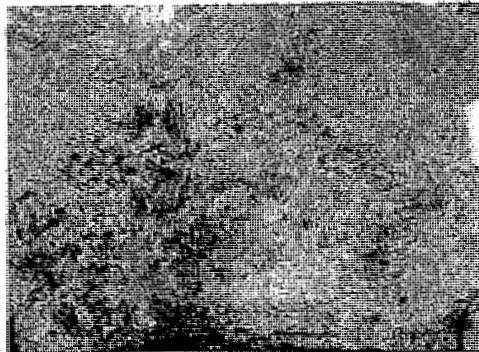
2. No.1 編み物（第1号貯蔵穴）



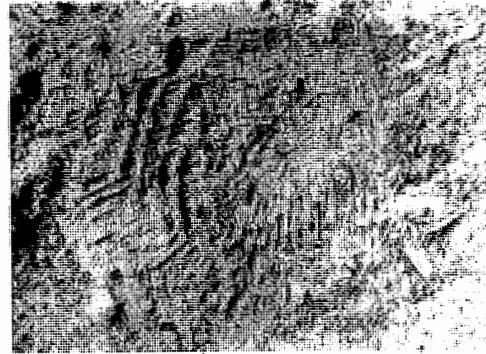
3. No.4 編み物（第9号貯蔵穴）



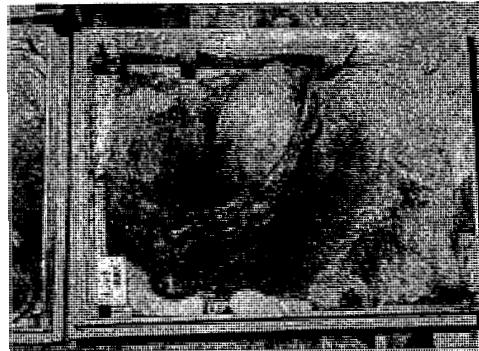
4. No.4 編み物・部分（第9号貯蔵穴）



5. No.5 編み物（第12号貯蔵穴）



6. No.5 編み物・部分（第12号貯蔵穴）



7. No.6 編み物（第14号貯蔵穴）



8. No.6 編み物・部分（第14号貯蔵穴）

編み物

写真2



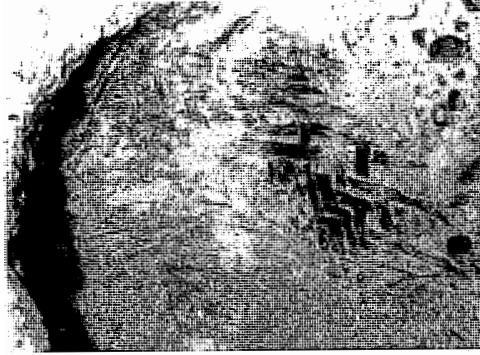
9. No.7編み物（第15号貯蔵穴）



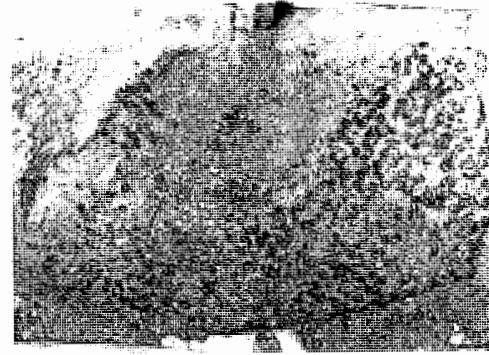
10. No.8編み物（第20号貯蔵穴）



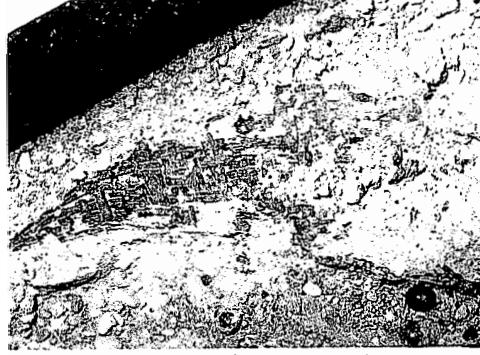
11. No.9編み物（第25号貯蔵穴）



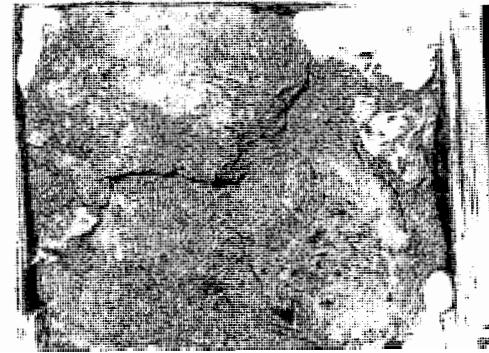
12. No.10編み物（第34号貯蔵穴）



13. No.11編み物（第36号貯蔵穴）



14. No.11編み物・部分（第36号貯蔵穴）



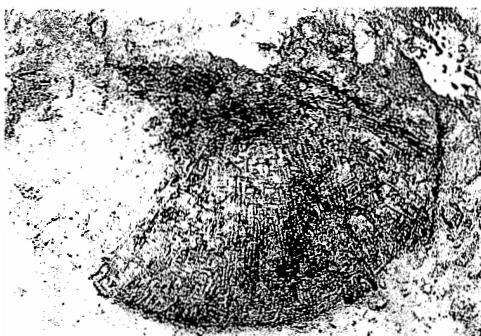
15. No.12編み物（第39号貯蔵穴）



16. No.13編み物（第42号貯蔵穴）

編み物

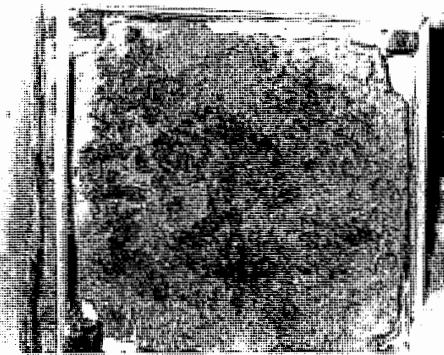
写真3



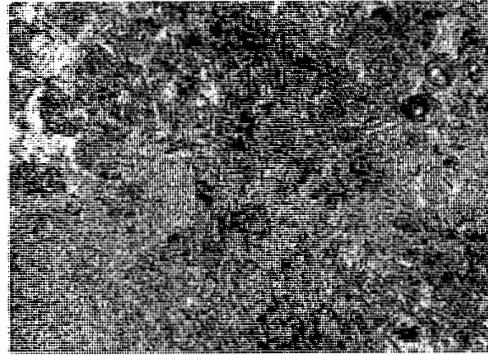
17. №14編み物（第43号貯蔵穴）



18. №15編み物（第45号貯蔵穴）



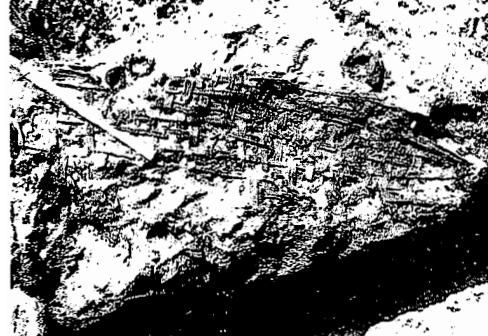
19. №17編み物（第53号貯蔵穴）



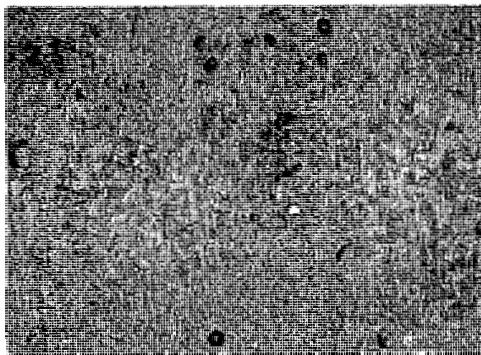
20. №17編み物・部分（第53号貯蔵穴）



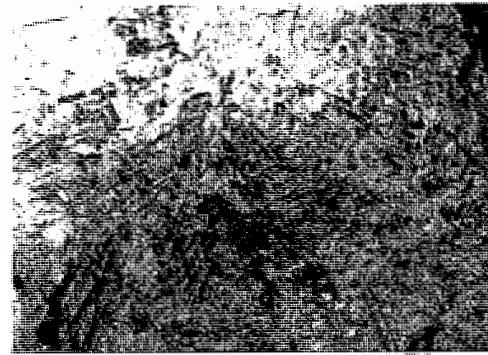
21. №18編み物・部分（第54号貯蔵穴）



22. №19編み物（第61号貯蔵穴）



23. №20編み物・部分（第62号貯蔵穴）



24. №21編み物（A-2区）

編み物

第15表 曽畠貝塚低湿地遺跡出土編み物製品一覧表

() 内はほぼ標準的な材の幅

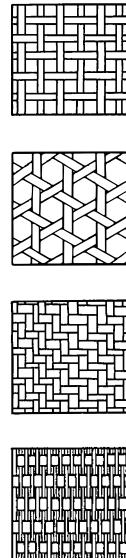
No.	貯藏 No.	図版 番号	写真 番号 (番 号)	全体の形状 (面番号 (番 号))	保存法量 ・ 残存部位	検出位置	縫み方	糸材の計測値 (mm)	備考	材質
1	1	124 (14)	1 (2)	(1) 細片のため不明 脛部か? 12×15cmが現存	・2本越え・2本縫り・1本送り (絹・緑とも) 綱代縫み	脛 7.0~1.9 (3.9) 緑 6.2~2.0 (4.0) ツル巻約3.2	・縫み方は全般的に粗縫であり、規則性もかなり崩れている。材は不規則な形状で縫合して縫み込んでいる。補強などの目的からであろうか。	アケビ 樹皮		
	125 (16)	1 (1)	(2)	同上 13×13.2cm	・1本越え・1本縫り・1本送り 四ヶ目縫み	脛 5.0~2.1 (3.9) 緑 4.2~1.8 (3.0) ツル巻3.7~2.2	・糸材にやや大目、糸材にやや細目の材料を使用する。材は不規則な形状で縫合して縫み込んでいる。補強などの目的からであろうか。 ・1本越えと同様、糸材のアルルを骨条に縫み込んでいる。(1)と(2)は、縫み方に相違はあるが、ツルを縫み込み技法の共通性から、同一個体の可能性が高い。			
2	5						・細片のため、観察不能			
3	8						・同 上		カシ類	
4	9	121 (1)	1 (3)	不明 1 (4)	底～脚部?	脛 痕穴の底面及び一部壁面	(1)、(2)の両機が認められる。 (1)1本越え・1本縫り・1本送り 綱代縫み (2)2本越え・2本縫り・1本送り 綱代縫み(緑・緑とも)	脛 4.2~2.2 (3.1) 緑 4.3~2.2 (3.1) 厚さ約0.7 脛 4.9~1.6 (3.0) 緑 3.0~1.5 (2.0) 厚さ約0.4 ～0.5	・縫がほぼ同じ材を使い、精密に縫みあげている。縫目はやや粗く、縫緑ともに約1.6mm程度の隙間がある。 ・糸材にやや細目の材を使、縫んでいる。(1)と(2)は、連続してどちら、また、縫み方も異なることから同一個体かどうかは判明しない。	アケビ
5	12	121 (3)	1 (5)	ザル?	底～脚部 28×23cm	脛 痕穴底面 (底部) 2本越え・2本縫り・2本送り 綱代縫み (明部) (緑・緑とも)	2本越え・2本縫り・2本送り 綱代縫み (明部) (緑・緑とも)	脛 4.0~2.4 (3.1) 緑3.5~1.5 (2.6) 厚さ約1	・ほぼ均質の材を使用して、目を詰めて縫みあげている。2本を1条にして底部を縫み、脚部でそれを一本に抜け展開させている。部位置により縫み方を使い分けしていることが理解できる資料である。	
6	14	121 (2)	1 (7)	不明 (カゴ?)	底～脚部? 60×80cm	脛 痕穴底面～壁面	1本越え・1本縫り・1本送り 綱代縫み	脛 9.5~6.5 (8.0) 緑 8.1~4.0 (5.2) 厚さ約0.7 脛 9.0~4.2 (6.2) ツル巻約2.1	・縫・縫ともにやや細かい材を用いており、縫み方は細い部分と密な部分の両方がある。部分によつては、材の細いものは2本を1条として利用している部分も見られる。縫み材全体がかなり幅広いのであつた推定される。痕穴内部には幾重にも折り重なるようにして検出され、上部には、大きな石の落ち込みも見られた。	イヌヒワ
7	15	125 (15)	2 (9)	不明 (カゴ?)	口縫～脚部? 12.3×16.2cm	脛 6.9~2.3 (4.8) 緑 9.0~4.2 (6.2) ツル巻約2.1	・1本越え・1本縫り・1本送り 四ヶ目縫みに近いもの	・使用されている糸材は幅広く、不规则で、縫み目も粗く組織的なツルを用いて補強している。縫留めの技法の如られる資料である。		
8	20	121 (4)	2 (10)	不明	脣部～底部? 23×30cm	脛 6.9~2.3 (4.8) 緑 9.0~4.2 (6.2) ツル巻約2.1	・縫み材の異なる縫み物片が二種類 認められた (1)脇 9.0~4.0 (6.5) 緑 6.5~3.5 (5.0) 厚さ1.0 (2)脇 7.2~4.2 (6.0) 緑 6.2~2.0 (3.9) 厚さ0.8 ～1.0	・縫み材は原則的に筋部分があり、糸材は不規則で、全体的に粗縫み方である。基本的な縫み方のほか、緑・緑の材の場合は、2本を1組にしてある部分も見られる。なお縫み材の緑の異なる縫み物片は、同一個体かどうかが判断できない。		

() 内はほぼ標準的な材の幅

No	貯藏 穴No	図版 番号 (番 号)	写真 番号 (番 号)	全体の形状	残存部	残存法量	検出位置	縫み方	業材の計測値 (cm)	備考	材質
9	25		2 (11)	不明	口縁、脚部 24×19.5cm	貯藏穴底面 ・脚部らしい縫み物と口縁部と 見られる縫み物片とが、重なる 形で出土	・1本越え・1本滑り・1本送りが 基闇 3.0～1.8 (2.5) 3.7～1.2 (2.0) 脚部 縫 3.0～1.5 (2.7) 脚 3.8～2.0 (3.0)～0.5	口縁に近い部分 基闇 3.0～1.8 (2.5) 3.7～1.2 (2.0) 脚部 縫 3.0～1.5 (2.7) 脚 3.8～2.0 (3.0)～0.5	・比較的に目の浅い部分で縫み方をしている。縫の部分はツル状の もので巻き縫留めしている。		
10	34	121 (5)	2 (12)	カゴ?	脚部～底部 36×60cm	貯藏穴底面～壁面 ・脚部から壁面にかけて、 約15cm程度の立ちあがりを見せ る。	・(絆・縫とも) ・2本越え・2本滑り・1本送り 脚代縫み	・(絆・縫とも) ・2本越え・2本滑り・1本送り 脚部上方 縫 8.0～3.3 (4.3) 脚 5.2～1.8 (3.5)	・底部～底部に近い、脚部 縫 8.0～4.2 (6.2) 脚 6.0～4.2 (6.1) 脚部上方 縫 5.2～1.8 (3.5)	・貯藏穴内の縫み物が、底面から壁面にかけて立ちあがること を示す資料である。縫み目は全く別の縫留めでおり、縫み方 は底部から脚部にかけて上上がるにつれて、縫目の材を使用し ている。	
11	36	121 (6)	2 (13)	袋状の縫み物?	脚部～底部? 73×50cm	貯藏穴底面及びラングリ焼上部 ・多層のシングリ焼に數き込まれ る形で出土。	・(絆・縫とも) ・2本越え・2本滑り・1本送り 脚代縫み	・(絆・縫とも) ・2本越え・2本滑り・1本送り 脚代縫み	・(絆・縫とも) ・2本越え・2本滑り・1本送り 脚 5.3～2.8 (3.6)	・多量のドングリ焼の下に敷き込まれる形で出土している。ド ンクリ焼の上部数ヶ所にも縫み物片が散在していることか らあるいは袋状の縫み物製品であった可能性もある。	カシ類
12	39	123 (10)	2 (15)	不明	脚部～底部? 30×35cm	脚部～底面 ・一部が非常に重なる形で出土	・(絆・縫とも) ・2本越え・2本滑り・1本送り 脚代縫み	・(絆・縫とも) ・2本越え・2本滑り・1本送り 脚 4.3～1.0 (3.5)	・(絆・縫とも) ・2本越え・2本滑り・1本送り 脚 4.3～1.0 (3.5)	・不斬の縫み材を使用しており、縫み目は、やや隙間がある。 縫面への立ちあがりは見られない。	アケビ
13	42		2 (16)	不明	脚部～底部? 42×43cm	脚部～底面	・(絆・縫とも) ・2本越え・2本滑り・1本送り 脚代縫み	・(絆・縫とも) ・2本越え・2本滑り・1本送り 脚 5.0～1.8 (3.2) 脚 4.3～1.5 (2.7)	・(絆・縫とも) ・2本越え・2本滑り・1本送り 脚 5.0～1.6 (2.9)	・やや細目の縫み材を使用し、縫み目の詰まつた縫み方をして いる。材の幅はほぼ均質である。	
14	43	124 (13)	3 (17)	ザル	口縁、脚～底部 23.7×25.8cm	脚部～底面	・2本越え・2本滑り・1本送り 脚代縫み	・2本越え・2本滑り・1本送り 脚 4.0～1.6 (2.9) 脚 4.0～1.5 (2.9) 脚 4.0～1.5 (2.9)	・(絆・縫とも) ・2本越え・2本滑り・1本送り 脚 4.0～1.6 (2.9)	・盤・輪とともにほぼ均質な材を使用し解密に編んでいている。蓋の となる縫み方は必ずしも正確なものではなく、不規則な部分 が多い。口縁の部分は、脚部を縫い込んだあと、余った縫余を折 り上げて束ねたものも少しくて見つかっている。焼成が況が良 く、当遺物は焼成した状態で貯蔵穴内に放置あるいは放置さ れた可能性が高い。	
15	45	123 (9)	3 (18)	不明	不明 5.6×4.8cm	貯藏穴 (後・晚期) 底面	・1本越え・1本滑り・1本送り 脚代縫み	・1本越え・1本滑り・1本送り 脚 約4.0 脚 約3.1	・1本越え・1本滑り・1本送り 脚 約4.0 脚 約3.1	・出土の縫み物のうち、唯一圓文後・晚期に比定される貯藏穴 から発出土したものである。ここで見る限りにおいては、他 の昭和前中期の縫み物ともも技術的な差異認められないと 思われる。	
16	47			不明	不明 (脚～底部?)	脚部～底面	・(絆・縫とも) ・2本越え・2本滑り・1本送り 脚代縫み	・(絆・縫とも) ・2本越え・2本滑り・1本送り 脚 7.0～2.0 (3.7) 脚 6.3～2.0 (3.8)	・(絆・縫とも) ・2本越え・2本滑り・1本送り 脚 7.0～2.0 (3.7) 脚 6.3～2.0 (3.8)	・縫み材は不規則のものを使用し、縫み目はやや粗い。縫合の 状態が悪い。	
17	53	122 (7)	3 (19)	ザル	脚～底部? 38×35cm	脚部～底面? ・(絆・縫とも) ・2本越え・4本滑り・2本送り 脚代縫み (脚部) 1本越え・1本滑り・1本送り 脚代縫み (脚部上方) 2本越え・2本滑り・1本送り 脚代縫み	・(絆・縫とも) ・2本越え・4本滑り・2本送り 脚 3.3～1.9 (2.9) 脚 3.2～1.9 (2.9)	・(絆・縫とも) ・2本越え・4本滑り・2本送り 脚 3.3～1.9 (2.9) 脚 3.2～1.9 (2.9)	・均質な縫み材を使用し、縫密に縫い上げている。底部では4 本の材を1条として作り、脚部ではそれと一本の材で、余 なし、展開させている。さらに口縁では「匂」部分では「2本 越え・2本滑り・1本送り」と縫み方を変えている。つまり 部位により縫み方を変えるが見られる資料である。		
18	54	122 (8)	3 (21)	不明	不明 59×55cm	貯藏穴 底面 ・広い縫み物の上部約6cmに小 片が重なる形で出土。	・(絆・縫とも) ・1本越え・1本滑り・1本送り 脚 7.0～4.0 (5.0) 脚 6.1～2.9 (4.3)	・(絆・縫とも) ・1本越え・1本滑り・1本送り 脚 7.0～4.0 (5.0) 脚 6.1～2.9 (4.3)	・縫み材は粗く、縫み目は、材1～2本分の隙間を空けて縫ま れている。上下2片の縫み物の関係は不明であるが縫み方等 に差は認められない。		

() 内はほぼ標準的な材の幅

No	坑號 (番)	圖版 (番)	写真 番号 (番)	全体の形状	現存状況・ 残存部位	検出位位置	編み方	糸材の計測値 (cm)	備考	材質
19	61		3 (22)	不明	不明 (胴〇・底部?) 8 × 17cm		・1本越え・1本滑り・1本送り 網代編み	縦 4.3 ~ 3.0 (2.9) 横 3.2 ~ 2.7 (2.9) 厚さ 0.4	・ほぼ均質な材を使用している。編み目にはやや隙間あり。	
20	62	123 (12)	3 (23)	不明	不明 (胴～底部?) 48 × 55cm		・1本越え・1本滑り・1本送り 四ツ目編み	縦 7.9 ~ 4.2 (6.0) 横 5.9 ~ 3.5 (4.5) 厚さ 1.0	・縦・横は、幅の異なる材を使用している。編み目の隙間は広く、材質も均質でない。縫合作りである。	イヌビワ
21	—	123 (11)	3 (24)	チャル?	胴～底部 22 × 26cm	不明 北側調査坑 (A-2区) 放層中より(おそらく未確認の所蔵 穴より検出したもの)	・2本越え・2本滑り・1本送り 網代編み	縦 4.5 ~ 2.6 (3.0) 横 5.0 ~ 2.0 (3.0) 厚さ 0.3	・ほぼ均質な繊細な材を使用し、目の詰ったアシロ編みを行っている。	



ザル編み アジロ編み 六ツ目編み

民俗例に見る編み目模式図